

# 沈金

## 前史雄のわざ

この映画は、重要無形文化財

「沈金」の保持者である前史雄が、

自らの考案による沈金ノミ(角ノミ)を使って

沈金箱「幽玄」を完成させるまでを、

克明に記録したものである。

微風にそよぐ竹林の奥深く小道が続く

静寂で幻想的な世界。

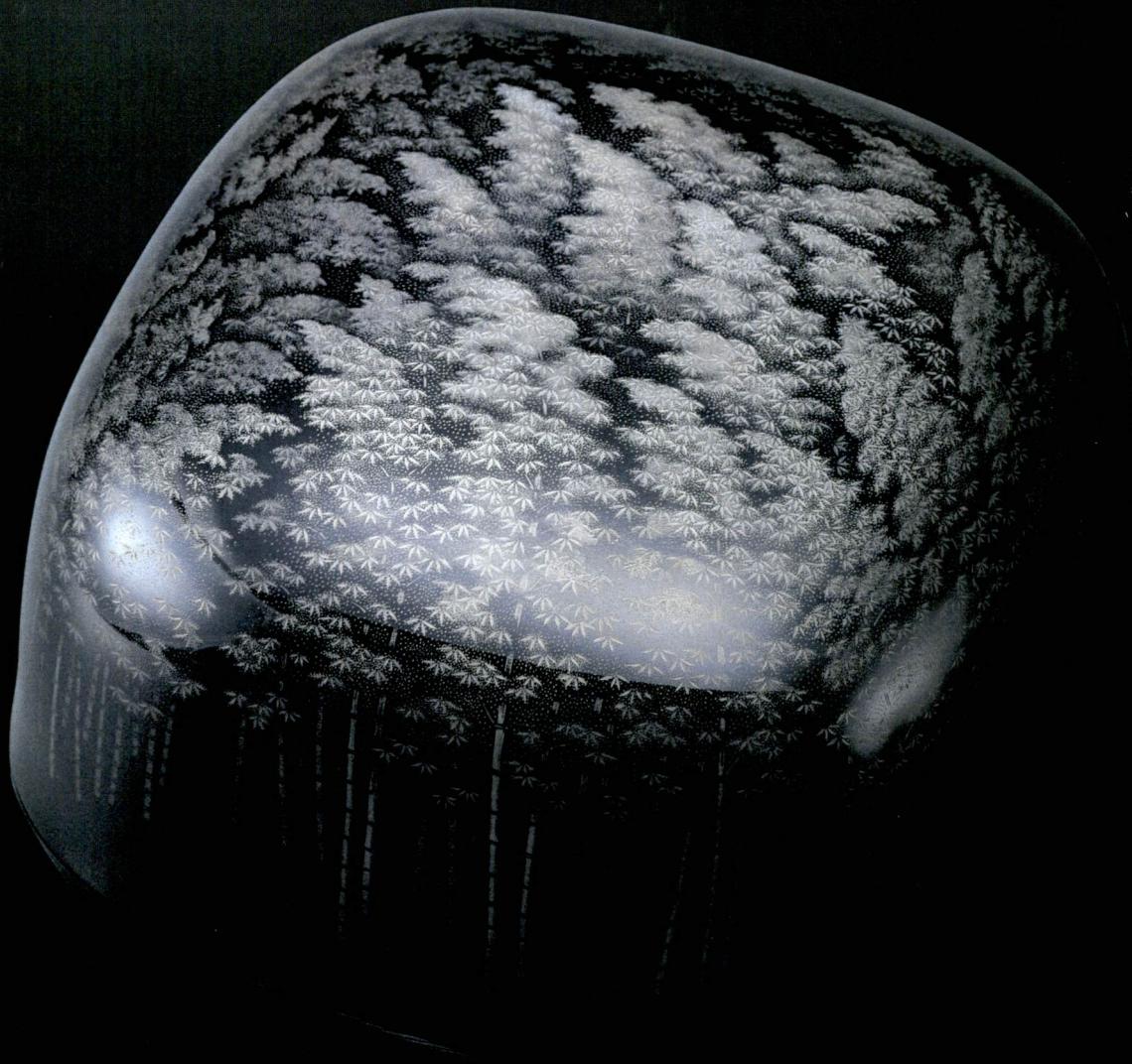
作者の深い思いや心象風景が

器の形に調和して描き出され、

観る者ここを引き込んでいく。

平成21年度  
工芸技術記録映画  
35ミリ・カラー・37分

企画 文化庁  
製作 桜映画社



# 沈 きらん 金

前史雄のわざ



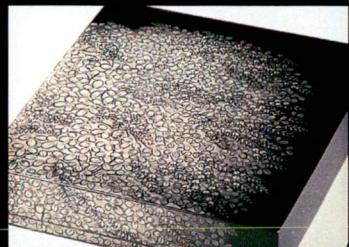
## プロlogue

竹林をスケッチする前史雄。いつも小さなスケッチブックを持ち歩き、一日一枚、図案を描くことを日課としている。



## 沈金とは？

「沈む金」と書く沈金は、沈金ノミを使い、漆器の表面に文様を彫り、彫溝に漆を入れて金粉や金箔を埋める、漆芸の加飾技法である。



## 前史雄の作品

前史雄の沈金の作品は、日本画を思わせるような叙情的な作品が多く、近年は水墨画のようなモノクロームの詩情豊かな作品を制作している。



## 前史雄の工房（仕事場）

前史雄の仕事場は、石川県輪島市の朝市通り近くにある。



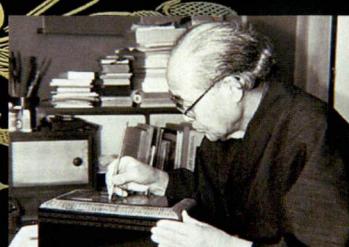
## デザインの構想

作品のデザイン構想は、スケッチブックの中から生まれてくる。今回のテーマは竹林。風に揺れる竹林をイメージして、目に見えない動きを表現してみたいと考える。



## 木地と漆下地

作品の箱の形と構想が決まると、これをもとに木地が作られる。下地には輪島地の粉が用いられ、沈金ノミのどんな彫りにも耐えられる堅牢な下地が作られる。



## 前史雄と沈金との出会い

前史雄の父であり、師でもあった前大峰は、点彫りを考案し、立体感あふれる表現を開拓した沈金作家だった。



## 代表作「沈金漆箱 篦」

平成4年、第39回日本伝統工芸展で日本工芸会総裁賞を受賞した作品。前史雄はこの作品で、自ら新しく考案した角ノミを使い、竹の葉一枚一枚をみごとに描いている。



## 沈金ノミのいろいろ

沈金に使うノミは、大きく分けて5種類ある。



## 下図の制作

沈金では、彫りが始まれば失敗は許されない。竹林のデッサンをもとに時間をかけて下図を練る。



## 置目（おきめ）

和紙の裏側から下図の線を白色顔料でなぞり、刷毛で上から擦り、図案を転写する。これを置目と呼んでいる。



## 角ノミによる彫り

彫りは、自身が考案した角ノミを用い、竹林の竹の葉を彫るところから始まる。刃先がV字型になった角ノミは、左右対称に近い竹の葉を一彫りで彫り、葉の鋭い感じが表現できる。



## 3種類のノミによる彫り

竹の幹は、丸ノミ、コスリノミ、剣ノミを組み合わせて表現する。



## 剣ノミによる点彫り

竹の葉の間に点彫りを加えることで濃淡やボカシをつけ、竹林全体に奥行きや雰囲気を作り出していく。

# 沈金

前史雄のわざ



## 漆引き

彫りの終わった箱に漆をまんべんなく塗り、このあと和紙で表面の漆を拭き取っていく。



## 粉入れ(一)

綿につけたプラチナ粉を、軽く叩くようにして彫溝に付けていく。



## 粉入れ(二)

箱の上部から側面にかけて、彫溝に松煙を入れ、プラチナ粉の銀色にグラデーションをつけていく。さらにカーボンで調子を整える。



## 仕上げ

部分的にプラチナ粉を加え、指先を使って全体の雰囲気を作る。粉入れが終わると、はじめて黒地に銀色の竹林の模様がはっきりと浮び上がってくる。



## 完成作品 沈金箱「幽玄」

冬の竹林は白い淡雪がひとりきわ明るく、陽が輝きはじめると、すぐ消え入るそのほのかな薄化粧が墨絵のような幽玄の世界を見せる。



前史雄 まえ・ふみお

昭和15年(1940)、石川県輪島市に生まれる。金沢美術工芸大学で日本画を学んだ後、昭和39年(1964)から父・前大峰に師事して伝統的な沈金技法を習得し、公立学校で美術教育に携わりながら制作活動及び技法研究を重ねた。沈金ノミに関する研究成果を活かして各種の彫刻技法を駆使し、情感豊かな作風を築き高く評価される。平成11年(1999)、国の重要無形文化財「沈金」の保持者に認定される。

